せめて彼に、水を

オールディー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
せめて彼に、水を

【Ｎコード】
Ｎ０３７６Ｑ

【作者名】
オールディー

【あらすじ】
剣崎がジョーカー化してから数十年後の世界。
日本から離れ、その能力で戦う剣崎の物語…。

仮面ライダー剣の創作作品です。

年代順だと
ＡＦＴＥＲＩＭＡＧＥ

←

せめて彼に、風を

←

せめて彼に、水を

となっています。

ペットボトル

――あれから、どれほど経っただろうか？

これまで何でもなかった長い月日を、たった一人で過ごし続けるということは、彼が予想する以上に辛く、険しい道程だった。

それはもう数十年も前になるだろうか？

彼が、世界を――友を護るために選んだ道は困難を極めるものだった。

そして、今に至る――。

「カズマ！」

名前を呼ばれて振り返った青年の身長は高い。だがそれに見合わないような薄い肉付きの体は、ここでは少し頼りないようでもあった。

ぱたぱたと駆け寄ってきた少年はまだ十歳にならないくらいだ。そんな少年を受けとめて、彼は屈託のない笑みを浮かべる。

「どうしたー？まぁた、何かあったか？」

笑いながらそう告げた彼の目の前に、ずい、と突き出されるペットボトル。その透明な輝きに、とたんに彼の――剣崎一真の喉がなる。

「配給で貰った。まだあるから、これはカズマにあげる」

そう言う少年の目はきらきらと輝いている。

だだっ広い砂漠の中、そんな子供の目を見ると、砂漠の中で草花を見つけたかのような気持ちになる。

少年の体は、まだ幼いといえどもそれでも小柄だ。やや大きめの服の袖から覗く腕も栄養状態がいいとはいえない。

ここずっと、なにも口にせず、さらに水すら得ていない剣崎にとって、目の前のペットボトルはかなり魅力的だ。

――だが、それは目の前の少年にしても同じこと。
身体中の細胞が、その一滴をもとめて叫んだが剣崎はあくまで笑みを浮かべたまま首を振った。
「俺は大丈夫。――これは持ってかえれよ」
「でも、一真こっちにはこないんでしょう？」
悲しそうな顔をする少年。こっち――それは、彼らや彼らの家族たちが集まる集落。争いのやまないこの地で、身をよせあって彼らがくらす場所。
そこでは、不定期ではあるものの時折配給がある。食料や衣類、薬品など。――本当に僅かでしかないものの彼らにとってはこの上ないほどの贈り物だ。
しかし、剣崎はいつもそのタイミングになるとその場を離れる。
――怖いから。

「俺は大丈夫。な？」
言い聞かせるように剣崎は首をかしげた。少年には他に家族がいる。
そんな中、このペットボトル一本分の水はかなり貴重なものだ。
それでも尚、彼はもどかしそうな表情をしていたが、やがてまた大切そうにペットボトルを抱き締めた。
「……うん」
そんな少年の頭を、剣崎は笑いながら掻く。
「ありがと…な」
「カズマも、何かあったら…言ってね？」
分かった、とうなずいて剣崎は彼を見送る。また後で行くから、というと少年は笑顔になった。
少年が去ると、剣崎はずるずると砂の上に座り込んだ。

「あーあ」
何言ってんだよ、と自分自身をあざける。
黙ってペットボトルもらっとけばよかったじゃん。お前、飲みたかったんだろ？
――まぁいい。
そう思った剣崎は、乾いた唇に笑みを浮かべる。

――俺は、大丈夫なんだから――。

――崎。
聞き覚えのある声。
――剣崎。
ゆっくりと目を開くと、やや大きな目をした男が自分を見下ろしていた。
ぎょっとして起き上がって周囲を見回す。
「――れ…俺…？」
確か、あそこに。
男の子がペットボトルを持って来てくれて…。
「どうした？まだ寝呆けてるのか？」
目の前で男が、盛大に顔をしかめた。表情のリアクションがオーバーなのは、多分表情を作ることにあまり慣れていないからなのだろう。
「――や――だって、俺たちは…！」
いいたい言葉が、多すぎる。多すぎて、見つからない。剣崎は困惑した表情になる。
「……俺たち…は」
――アンデッドだ。
「――アンデッド？」
口籠もった剣崎に、男は――相川始は眉をひそめる。
「何だそれは？」
唖然とする。
だがふいに、腕をつかまれてぐいっとひっぱりあげられた。
「寝呆けてるのか知らないが、今日は手伝いの約束だろう？」
「――手伝い？」
まだ状況が飲み込めない剣崎に、ついに始は怒ったような顔になっ

た。
「ハカランダの、だ。お前、どうしたんだ」
あぁ――。
剣崎は笑みを浮かべる。
「や――ごめん。変な夢見ててさ――」
歩きだし剣崎は妙に納得する。そうか、あれは夢だったのか。
「――俺が、紛争地域でペットボトル貰う夢。それが妙にリアルでさぁ」
砂の感覚から、喉の渇きまで、鮮明に思い出すことができる。
「――あ、そうだ。お前に珈琲淹れてもらおうかな」
「なんで俺が」
「えー、いいじゃん」
「手伝いが終わったら淹れてやる」
素直じゃない物言い。その表情。すべて記憶のままだ。剣崎は嬉しくなる。
「――あ、剣崎さん」
「っよ!」
客が込むハカランダではエプロン姿の天音がすでに、手伝いをしていた。
始はだまってエプロンを突き出してくるので、剣崎は受け取って紐を結ぶ。
「ごめんなさいね、剣崎君――」
「――や全然」
カウンターのむこうから、遥香が首を伸ばしてくる。剣崎は笑って首を振りながら冷水の入ったコップを用意する。
「オーダー頼むぞ」
「りょーかい」
始は厨房に入っていく。
「いらっしゃいませ」
店の扉が開いて入ってくる客にむかって笑いかけ、盆にそのグラス

を乗せて向かう。

――自分は、何て長い夢を見ていたんだろうか。
彼と別れて数十年も、一人で世界を歩き回るだなんて。

「ご注文は――」
そういって、客の座った席にグラスを置こうとしたとき、つるりと指先でグラスが逃げた。
「――あ」
短く声をあげたが、間に合わなかった。
ガシャン、という音とともに床にちらばるガラスと水滴。
「うわ――っすみません」
客とハカランダに謝りながらガラスの破片に指を伸ばした時に、鋭い痛みが奔った。
「――ッ」
できた傷口に舌打ちして、見たときに、ふいに剣崎は凍てつく。

――え？

「きゃああ――！！」
ハカランダが静まり返る。
剣崎の側にいた客が悲鳴をあげた。遥香と天音はびっくりしたように顔をあげ、厨房からは始が飛び出した。
「――どうした！？」
駆けつけた始の前には、逃げるように席を立ち上がった客と、うつむいた剣崎が。
散らばったグラスを前にして動かない剣崎をみて不審に思った始は、その顔を覗き込む。

――痛い。

傷口から流れだす血が、鮮やかな緑色の液体が、彼の指先から流れていく――。
「は……始…！？」
すがるように、視線を転じた剣崎。
だが、そこにあったのはこの上ないほどの、冷たい目をした始だった。
「剣崎――お前――」
明らかな、畏怖。
――人間じゃなかったんだな。

戯れ

はっと我に帰る。
日当たりしてしまったのか、普通に目覚めた時とは違う不快な感覚。
ふらり、とその細い体が立ち上がった。だが、足取りはおぼつかない。
――あー、やべぇ…。
力が入らない。
完全な脱水症状。
そして、夢見の悪さもあいかさなって気分は最悪だ。
歩きだして剣崎は先ほどの戯れに笑う。
もう戻れるはずがないのに。
自分がかわったからという問題だけではない。
あの日からもう数十年が経過している。
夢の中の皆が変わらぬ姿であってくれたのは、自分が彼らを知らないから。

ざっ、ざっ、と砂を掻く足を止める。
剣崎は倒れた。
「……っ…」
歯を食いしばる。
耐えるように、指先に力を込めたが掴むのは、なんの手応えもない砂だけ。
――なるもんか。
限界に陥ると、剣崎の体の中で、もう一人の自分が暴れはじめる。

本能的な危機感で。
生き残らなくては、という本能で――。

「――ぅう…いうぁあああああ――ッ…！」
苦しげな叫び声。
それとともに、剣崎の体が変化した――。

「カズマ、いらないって」
「あら…」
ペットボトルを持って帰ってきた息子の顔を見て、不思議そうな顔をした母。
「…でも、配給にも来てなかったし…」
「うん。――また来るって」
ある日ひょっこりやってきた青年のことは、彼らの集落でも噂になっていた。
この周辺では見かけない顔立ちに服装。おそらく外国から来たのであろう奇妙な青年が、不審な目で見られたのは数日だった。
屈託のない笑顔を浮かべて、子供達とふれあう彼の姿は、彼らにとっても好意的に見えた。困っている家族が、彼に助けられたという話もよく聞く。
いったい、何が目的で、どうして無償で彼が自分たちに尽くしてくれるのか分からない。まるで報酬を求めないその姿は――異様にも見える。
「今度ね――またチャンバラするんだ！」
棒をぶんぶんと振り回す我が子の姿に、彼女は微笑む。
「――カズマと一緒にいれて楽しい？」
答えは、決まっている。
「うんっ！！」

「――…」
瞬きして――そして、おそるおそる立ち上がる。
目の前にもうテントの山が見えていた。いつのまにか集落の近くに来ている。

体調は、すっかり快復していた。何の処置もされないまま。
――あり得ない。
もしも彼の状態を知っていた人々が見たなら言うだろう。
だが――
だが、剣崎は――。
「よう、カズマ！」
どきっとする。
振り返った先に地元の住民がいた。――だが、そう呼ばれた――ということは、心配する必要もない。
「よっ」
彼らがこうして自然に声をかけてくれるようになって――嬉しい。
笑顔で剣崎も手を挙げると、相手も笑顔で歩み寄ってきた。
「――またどっか行ってたのか？」
「うん、まぁ…」
剣崎が、なんらかの事情を抱えているということは、もう暗黙の了解だ。
配給にやってくるのは、この近辺の兵士だが、明らかに外国人である剣崎がここにいるのが知れたら問題になる。
そして住民たちも、敢えて剣崎のことを口にしたりはしない。
「そういえば、この前娘が喜んでたよ――」
「――え？」
不思議な顔をする剣崎に、男は笑いながら言う。
「――サンスウ？って言うのかな。計算教えてくれたってな」
あぁ――と剣崎は笑った。言葉の壁は――もう随分と前に乗り越えた。時間は充分あったから。
「いや、あれくらい――」
「――いや、ありがたいさ…俺らにとっちゃあ」
しみじみと呟いた男の顔は暗い。
剣崎がかつて日本で暮らしていたときに何でもなかった頃には、当たり前すぎたことがここでは違う。

学校、勉強は面倒なことで――水は蛇口をひねれば出る。
世の中にはそういう場所もあるんだと、習って知ったつもりでいた自分。
明らかに不審な自分を受け入れてくれた彼らにできること――それくらいしか、おおっぴらにできることはなかった。

――そう、公には。

「――本当にな」
念をおすように、もう一度彼は言った。その視線には、明らかに書いてあった。だから――真実を教えてくれ。
剣崎はあいまいに笑ってごまかす。
「よかった」
そんな自分が、嫌だった。

戯れ（後書き）

算数…数学じゃないというのが、ポイントですね（笑）
公式設定では文武両道らしいですが…（＾０＾；

遊戯

「カズマ！」
広場にいた子供たちは、その姿を認めるなり一直線に駆け出した。
「ねー、チャンバラしよう！」
「昨日の続きは？」
「そーだよ」
既に棒を持った少年たちにたいして、少女たちが声をあげる。
「じゃあ、もうちょっと進めて――」
なぜかそこまで言うと、頭がふらついた。
――なんだ…？
嫌な予感がした。
いまだになれないこの感覚。第六感というのだろうか？　もはや勘では無視できないその感覚は不快でしかない。
「――そしたらチャンバラしよ」
わかった、と叫んで走っていく子供たちを見送りながらそれでも剣崎は妙に強ばった表情のままだ。
――なんだろう…？
分からない。
分からないから気持ちが悪い。
こんな時、剣崎は考えずにはいられない。

――自分の片割れのような存在である彼の事を。

「――じゃあ、7と25で？」
がりがりと剣崎のもつ枝の先端が、地面を削った。しばしの沈黙の後に次々と返ってくる答。
「32」
「――サンジュウニ」

「さんじゅうに！」
「あってるあってる」
にこにこうなずく剣崎と叫ぶ子供たちを、その場を通りすぎていく住民が笑顔で眺めていく。
「――じゃあ今日はここまで！」
そういって枝を投げ捨てた剣崎をみて、少し惜しそうな声を出す子供。だがほとんどは歓声をあげて棒をもってくる。
「――また教えてね、カズマ！」
「ああ」
手を振りながら去っていく少女たちにそう返しながらも、剣崎はさっさと連れられていく。
きゃーきゃーと声をあげる子供たちに混ざって、剣崎も棒を振り上げた。
「うぇい！」
――と、いっても彼は子供の攻撃を受け止めるだけで、防御ばかりしている。
その屈託のない笑顔の裏にあるその事情を知るものはここにはいない。
――だから、剣崎も安心して笑える。
しかし、その構えを見たものがいたとすれば、間違いなく、かつての戦士の姿を思い出すだろう。
「うぇい――！」
子供たちに混ざって響くその掛け声。

――仮面ライダーブレイドの姿を。

「またねー」
それぞれの帰路についていく子供たちを見送っていると、やはり最後に残るのは自分だけだった。
「……帰るか」

ぽつり、と呟いてあるきだす。
剣崎にとって家族というものは、欲しくてたまらない温もりだった。両親を思い出そうとすれば、甦るのはいつも炎の中。日にちが経つにつれて、思いでは錆びていく。
――だからいつかは、自分が、なんていう思いも実はあったりした。だがそれも昔の話だ。

昼の暑さはどうしたものか、まいどまいど夜になると急激に気温は下がる。
「――…さっみ…」
半袖からのぞく腕に、鳥肌がたつ。しかたなく、剣崎はわずかなビニールシートの上に横になった。
「――おやすみ」
誰にいったわけでもないが、なんとなくそう呟きながら――。

遊戯（後書き）

紛争地域という設定がよくわからず…（｜＿｜；）
おかしなことになると思いますが、どうかご容赦を
おまけに剣崎がいい人過ぎるかも（笑）
指摘や感想いただけるとすごく嬉しいです

獣

「な…なに今の…」
響いた家畜の悲鳴に夫婦は飛び起きた。真夜中に起きた出来事は不気味で、二人は不安そうに顔を見合わせた。
「……野良猫だろう」
ごまかすようにそう言いながら、男は、手近にあった棒を手にして歩き出す。
「見てくる――」
不安そうに見守る妻をおいて、男は呟く。
「――――コケェッッ！」
再び響いた悲鳴に、相手が二羽目に手を出した事を悟った。
――野良猫じゃない。
とたんに倍増する恐怖。
「誰だ――――…！」
「……カァ――」
聞いたこともないような、渇いた声が聞こえた。
薄暗い明かりの中、二メートルは優にあるであろうその巨大なシルエットが、うごめく。
言葉もでずに尻餅をついてそれを見上げる男に気付いたその巨体が、なんと一歩足を踏み出してきた。
「――――」
何かを相手が口にしたが、男の耳には聞こえなかった。
――殺される――。
「く――来るな！」
やっとの思いで男は、そう吐き出す。
はっきりとした拒絶の言葉を耳にした巨体が、ふいに足を止めた。
「――どうした！？」
悲鳴を聞き付けた応援が、松明を片手に近付いてくる。それに気付

いた目の前の生き物は走りだした。
「大丈夫か！？」
駆けつけてきた仲間に尋ねられ、男はまだ青い顔のままうなずく。
「ば……化け物が…」
そう告げる男の目の前。松明の炎の先、残されていたのは無惨な鶏の死骸だけだった――……。

――バカヤロウ。バカヤロウバカヤロウ。ナニヤッテンダ、バカヤロウ。バカヤロウバカヤロウバカヤロウ。
――ダッテ、ハラヘッテタカラ。ウマカッタヨ。
――ナニイッテンダ、バカヤロウ。ナニヤッテンダ、バカヤロウ。
病原菌の住みかとなって、飲むことは勿論、入ることすら危険とされているその濁った川に飛び込んで、必死に自分についたその液体を流そうとする。
厄介なことがあった。
この体は、飲まず食わずでも生きていけるはずなのに、時折それを求めて暴れだす本能。
それは、かつてこの体がそれをしていたことを覚えてしまっているからなのか……。

――…戦えば、戦うほど俺は一匹の獣に戻っていく。

かつての友の思いが、痛いほど理解できる。
「――…バカ…馬鹿」
体についたその血を洗い流そうとして、もがく。その間にも嗚咽のような声をあげて、自分を責め続けた。
授業とおなじで、知ったつもりになっていた。この苦しみも、もどかしさも。
やがて、水を掻いていた音が止んだ。
川に浸かったまま疲れきったように動きを止めていた剣崎は、ふと

口の中に違和感を感じる。
指をつっこんで、取りだしたそれは、羽だった。
「――…っは…はは」
渇いた笑い声があがる。
口の中に確かに残る、その生臭い味も、諦めて味わう。
渇いた笑い声を、あげつづけて、剣崎はその場で夜を明かした――。

獣（後書き）

剣崎、鶏を喰らう。の巻でした。
始に比べて、人間であった時の事を知っている剣崎は余計に辛いでしょうね…

パソコンだったらすぐに文字数がいくのに…。
携帯だとどうしても文字数が減ってしまいます（涙）

リンク

「カズマ――！」
駆け寄ってきた男は、昨日剣崎に娘のことを話した男だった。だが、彼に気付いた剣崎の表情が一瞬歪む。
「昨日、化け物が出て――」
「化け物……」
呟いた剣崎の顔は、神妙だった。他の住民たちと同じく。だが、剣崎がその表情をしたのには別の意味がある。
「あぁ――もうそれは…でかくて…。お前なにか知らないか？」
「――いや…」
そうだよなぁ、と納得して踵を返す男。剣崎はうつむいたままなにも言えなかった。
「嫌だ…気味悪いわ…」
ささやかれる言葉に、ふと剣崎は逃げるように背を向けた。誰も彼を怪しみはしない。分かってはいても、その場に留まることは辛かった。
「カズマ――」
ふいに名前を呼ばれて剣崎は顔をあげる。無理にでも笑おうとして、顔の筋肉を緩める。
女は、あのペットボトルをもってきてくれた少年の母親だった。
「――ちょっとよってって、珍しいものが来たの」
「――や――」
せっかくの申し出だか断ろうとした剣崎の腕を笑顔で引き留める。
「ね――？」
結局、半ば強引に連れていかれたのは彼女の家だった。
「カズマ――！」
「よう…」
少年が飛び付いて出迎えに出てくる。受け止めて弱々しく剣崎は笑

った。母親は、奥から何やら袋を持ってくる。
「これね――今回は小麦の値上がりで、穀物がこれしかなかったらしいの」
小さな袋を覗きこむと、それがなつかしいものであることを知った。
「米だ――！」
懐かしい。
思わず手にとってしげしげとながめる。長粒の米ではなく短粒のしょうしん証明の母国の米。
嬉しそうに顔を輝かせる剣崎を、親子は見つめて互いに顔を見合わせた。
「――それ、よかったら持ってって」
「――え…」
虚を突かれたように振り返り、自分がしていたであろう顔を予想して口を結んだ。
「――今まで…お礼なんてぜんぜんできなかったし」
そういって、彼女は息子を手繰り寄せる。
「――どうして…俺が…」
――これを見て喜ぶと思ったのか…。
「配給に来た人たちのマークとね、カズマのマークが一緒だった！」
告げられた言葉を、理解するのにこんなに時間がかかるだなんて。
擦りきれた服の表明にあるマーク。六角形の集まったマークの中にあるＢＯＡＲＤのアルファベット。
――忘れるはずがない。
忘れられるわけがない。
「…カズマ？」
フリーズした剣崎を、少年は不安そうに見つめた。目を見開いたまま、瞬きをしない剣崎。
――ボードが…。
いったい誰がまたボードを再興させたのだろう？
脳裏をよぎるのは、かつての先輩と上司。

「……いや…でも…」
しどろもどろに袋を返そうとした剣崎に、彼女は笑む。
「そういうと思ったわ――。だからせめて、一緒に食べましょうよ」
首を振ろうとした剣崎だが、ふと我に返る。
甦るのは……――昨晩の出来事。

――…嫌だ。

「――…ね？」
うなずく。
溢れそうになる涙をこらえながら、うなずくしかなかった。

「……おい、冗談だろう」
集められた男たち。囁かれる声は低く、圧し殺されている。
「いや…すでに決定事項らしい――」
「――…だが…だったら俺達はどうしたらいい！？」
やり場のない思いを体現したかのように、もどかしそうに声を発する。
誰もその問いかけに答えることはできず、沈黙がはびこる。
「……どうすれば…いいんだろうな――」

「――米だあ…」
目の前に炊き上がった白米をみて剣崎は、情けないような声を出す。
量を増やしたいのなら、普通にたきあげる方法はよくないのだが、
ここは贅沢に――剣崎の手によって調理された。
「…美味しいの…これ…？」
鍋に焦げ付いた部分を指差して、失敗だよとでも言うように少年は
顔をしかめたが剣崎は首を振る。
「これがいいんだ」
そういって皿に取り分けようとした時、ふっと背筋があわ立つよう

な感覚を抱く。
――これは……。
そして、剣崎の脳裏に描きだされるビジョン。
もはや、ただの勘だと無視することができなくなった第六感が騒いだ。
「……行かないと…」
「――え？」
何かに取りつかれたように呟く剣崎の顔から表情が抜け落ちた。
「カズ――」
その名を呼ぶ声を無視して、剣崎は飛び出す。

――行かないと。
――行きたい。
――違う、これは――。
――行きたいんだろ？

悲鳴、火薬、血――。
戦いを連想させるものすべてが剣崎をただただ、その場へと駆り立てた――。

奇妙な勝利

それは、約一ヶ月前のできごと。
「頑張れ！――頑張れよ！」
「……駄目だ…もう充分だ。ここに帰ってこれただけで…」
ぼろぼろになった男を支えているのは、長身痩躯の青年である。
足元の砂は、ただでさえ思い足取りをさらに重くしていく。灼熱の太陽の下、青年はもう歩くことすらままならない男を半ば引きずるように進んでいた。
「あぁ…家だ……まさか――帰れるなんて…」
男は涙を浮かべる。青年はもう一度男を背負い直して、進んだ。
「すみません！」
扉を叩いて声を張り上げたが、返事はない。焦りがにじんだ。もう、この男にあまり時間はない――。
「誰か――誰かいませんか！？」
必死な叫びに近隣の住民が気付いた。やってきて、異国の風貌を漂わせる剣崎を怪訝そうに見つめたのちに、その傍らにボロキレのようになっている男に気付く。
「ッあんた！」
「この人の家族は！？急がないと！！」
詰め寄った剣崎をいぶかしみながらも、うなずいた人物は駆け出す。
剣崎は男を日陰に横たわらせると、状態を確認した。
「……ああ…もう…夢みたいだ――」
攻撃を受けた瞬間、男はもう駄目だと思った。一緒にいた仲間の中にも生きていると思われる人物はいなかったし、自分が重症を負ってしまったこともすぐに分かった。
――だが。
「おい！大丈夫か！？」

まだ砂埃が立ち込めるなか、誰かがやってきた。同じ場所にいたというのにまったく負傷していないその姿に驚きつつ、たどたどしくここまでの道を教えたのを覚えている。
「あとちょっとで、来るから――頑張れ！」
「あんた…どうして……見ず知らずの俺に…」
「何いってんだ、目の前に人が倒れてるのに無視できるわけないだろう！」
ああ――男は深くため息をこぼした。
こんな人間が、この争いの中でいる訳がない。
同じ攻撃をうけたはずなのに、全く負傷せず――己の身を危険にさらしてまで他者を救う。
「父さん……！」
いつのまにかできた人垣をぬって、男の子が駆け込んできた。
「……ああ…よかった――」
最期に息子を見れて。
「あなた…！」
妻と我が子をもう一度目に焼き付けて、そして自分を運んできてくれた青年をみつめて彼は囁く。
「――その方は…」
――しかし、全てをいい終えるほどの気力はなかった。
はた、と糸が切れるように事切れた男を見つめて、彼らは凍てつく。
「――父さん…？」
男の子は、がばとその血で汚れた体に抱きつく。自身がそれで汚れることなど気にも止めず。
「……父さん――父さん……！」
悲痛な叫び声に彼らは視線をそらし、うつむく。
「……全滅だな――」
亡骸すら手に入れることもできないというのが当たり前だ。彼はまだ――恵まれた最期をとげれたのだ。
やがて、人波からひっそりと抜け出す姿があった。

異国の青年に向かって、一人が呼び止める。
「待ってくれ――あんたは一体…」
「…ただの…通りすがりです」
通りすがりが、すでに立ち入り禁止になってしまったような紛争地域来るものか。しかし、こうして仲間の死に目を家族に引き合わせてくれた男を彼らは敵だとは思えなかった。
「――金目のものはないんですが…せめて…」
夫の死にうちひしがれることなく立ち上がった女はそういって、身につけていた食糧を手渡す。
ほんの僅かな小麦が入ったその袋を、ちらと振り返った青年は笑った。
「いりませんよ――」
「――でも…」
何とかして、夫の死に目に会わせてくれた彼にお礼がしたいのだろう。だが、青年は首をふる。
「名前は――名前だけでも！」
必死に呼び止める女の声に彼は振り返った。嬉しそうに笑みを刻んで、告げる。
――俺は、剣崎一真です――。
「カズマ…どこ行ったのかな…？」
炊き上がった米を前にして喜んでいたはずなのに、突然出ていった剣崎の身を男の子は心配していた。
「さぁ…」
首をかしげて母親は米を見つめる。
マークの事を告げたときの剣崎の顔。喜んでいるのか、追い詰められているのかよく分からない――必死な表情。剣崎と彼らに何らかの関係があるのは確かだ。
――カズマ…。
夫を連れて帰ってきてくれたように、献身的に自分たちに身を尽くすその姿は人間より、神に近いのかもしれない…と、彼女は考える。

「もうちょっと、待ってみましょう――」
彼女はそういった――。

武器。血。
さまざまな鉄の匂いが、
鼻孔をくすぐる。
今すぐ吼えて、そこらじゅう駆け回りたい気持ちを抑えて、銃弾と罵声が行き交う戦場を、恐れることなく突き進む。
「…近づいてきてる…」
戦線をみながら剣崎はふとつぶやく。初めてここに来たときよりも確実に、防衛ラインは下がっている。
無理もない。まともな武器はない上、戦力差はあまりにも大きい。辺りには戦闘によって破壊された民家が立ち並んでいる。ここもかつては、民住区だったのだ。
しかし争いが続くにつれ、彼らは非難して一ヶ所に集まって――今の町ができた。
このままでは、町まで食いつくされてしまう。
戦って抵抗していた彼らも、もはや戦う力すら削がれつつある。
だから、せめて――。
「うぁあああ！！」
敵のど真ん前にに出た剣崎は、吼えた。
水飛沫のようなものが飛び散り、その姿の輪郭が歪む。

「な――何だ…！？」
その声を耳にした兵士たちは息を呑む。
正規の軍人ではなく、雇われ集められた兵士たち。
「…これが、噂になってるやつか」
ふいに、一人が呟き仲間内で悲鳴があがった。
転じた視線の先、逃げ惑う兵士と砂埃の中近づいてくる巨体。
放たれる攻撃も、銃弾もものともしないその生き物は、やがてその

手に握られた剣を翳す。
「……逃げろ…」
太陽の下、その切っ先が輝く。
「うわぁあ！！」
悲鳴へとかわるその場で、それは――剣崎は自身の体の一部となった剣を振り回した。
闇雲にみえるその動きは、決して致命的な怪我をさせないように気を遣われている。
「――う…わぁあ」
そんな剣崎の前に倒れた兵士が、その剣が振り下ろされる事を予想して悲鳴をあげた。
――だが、ふい、と兵士の前で化け物は避けていった。
「……え」
再び吼えながら他の場所にいく化け物。
今の瞬間、確かに自分の命を奪えたというのに――？
まさか、という思いがよぎる。
――そして、その予想は後に剣崎を追い詰める結果を引き寄せることとなる。

「ウ――ェェア！」
ひたすら相手を威嚇して剣を振り回していた剣崎は、ふと我に返る。
――もういいだろう…！
撤退の色を見せはじめた敵を見て言い聞かせる。
だが欲望はさらなる破壊と血を求めて騒ぐ。
――止めろ！俺は、ジョーカーじゃない！！
ぴたり、とその腕が止まった。
撤退していく彼らを見送りながら、剣崎はやがてもとの姿にもどる。
なま暖かい感触に剣を持っていた自分の手を見ると、真っ赤になっていた。
「……ジョーカー――か…」

破壊と殺戮を求めて暴れる存在。
たとえ入れ物がそれになってしまおうても、内側までそれにはならない、と剣崎は心に誓っている。
だからジョーカー態を使用することができるし、その姿になるこてにも耐えれる。
――だが…実際、剣崎はまだ完全なジョーカー態にはなったことがなかった。
ほんのわずかな部分だけ、それを留めておかなければ、怖かった。
――元に戻れないような気がして。
ジョーカーになった瞬間、まず感じたのは目の前の始――もう一人のジョーカーへの殺意だったことを覚えている。
そんな自分に愕然としたし、怖くてならなかった。だから、逃げ出した。
――早く帰らないと。
剣崎は歩きだす。
そうしなければ、彼らにも見つかってしまうから…。

「また退いたな…」
第一戦線近くまで来ていた敵が、またひいていった。
「後で先頭の奴らに聞かないとなぁ…」
「あぁ」
不思議そうに呟きながら彼らはため息をつく。
「…助かった…」
安堵する空気。もしかしたら、ここまで到達されてしまうのではないか。そんな危機感といつも隣り合わせだ。もはやずっと気をはっておくだけの気力もない。
「……ん？」

双眼鏡で、敵の撤退を眺めていた一人は、そのときたった一人で歩く人影を見つけたような気がして、瞬きを繰り返す。

――まさか。

もう一度双眼鏡を覗き込んだ時には、案の定何も映らなかった――。

奇妙な勝利（後書き）

戦闘シーンとか…苦手だな（泣）

迫る影

痛い、と気付いて胸元を見つめる。
べったりとこびりついた緑色。ぼんやりと痛みを感じつつ瞬きを繰り返す。おそるおそる緑色の部分に触れてみる。――すでに傷口は塞がっていた。
未だにその色をみても、ぴんとくることがない。しかし、見つめるたびに悲しくなる。なぜだか…とても。
歩きだしたが、行くあてなどなかった。きっと町に出れば皆が笑顔で迎えてくれる。しかし…自分は永遠にその壁は越えられない。
そういえば、せっかくご飯を炊いたのに食べていない。どんよりと歩きだした剣崎は、ふと変な感覚を抱く。
――なんだ…？
ちりちりと熱を送るような…間違いのない殺気。とっさに飛び出しかけたが、突然内側でそれが暴れだした。
「…な…――！」
息を呑んで体を折った。剣崎の意志に関係なく暴れる本能を押さえ込もうとしてうずくまった。
――ダメダダメダダメダダメダ…！
目の前のそれが、動きを止めたのがはっきりと分かる。こちらを見ている。
見ないでくれ、近づかないでくれ、お前がきたら俺はお前を殺さなクチャイケナクナル…！！
「――ウァアアアッツ！」
剣崎は、思い切りその肉の薄い己の腕に歯をたててたえつづけた――。

――剣崎、あと少しだけ時間をくれ。

――始……。
深く、深く、眠りについた剣崎の耳に、本当に今そこに始がいるかのように声が届いた。瞬きされないその目は哀しげに歪められている。
――いいよ。俺は大丈夫だから。
本当か？
いや、違う――。
それでも哀しげな始の顔を見て笑いながら、軽く触れる。――触れて、息を呑む。
ふしくれだった、強靭な手。
誰かに触れるためではなくて、傷つけるための、この手。
――すまない。…本当にすまない…。
泣きそうな顔の始の姿と、己の姿を見比べる。なんと違うことか。
剣崎は…――いや、ジョーカーは首をふって目の前の事実を否定するかのように吼えた――。
「――マ。……カズマ！」
跳ね起きる。
傍らにいた少年はびっくりしてその顔を覗き込む。
「――大丈夫！？」
「…――来るな！」
少年はぴたりと動きを止めた。なのにそう言った剣崎自身が一番びくびくしていた。その追い詰められたような顔を見て少年は不思議そうにしていたが、やがてすがるような表情になり――涙をこぼした。
「…僕たち…このままじゃ…皆殺されちゃう…！」
いきなり泣きはじめた少年に剣崎はついていけず困惑する。
「――え…？…何、なんかあったのか…？」事態がのみこめない剣崎の前で少年は嗚咽混じりに、大声で叫んだ。
「――僕達の住んでる場所が基地にされるんだよぉ！！」
剣崎は愕然とした――。

その話を、一部の人間は先に知っていたらしい。何度も取り下げを願ったのだが、拒否された。
自分たちを救ってくれる存在だと、わずかばかり国を信頼していたもののその相手から告げられたのはあまりにも残酷な通達だった。
「この近くで…他に住める場所なんてない…」
何もない砂の大地が広がっていても水源がない。ただでさえ近づいてくる敵に、徐々に土地をすり減らしているというのに…。
「――で？相手はいつ出ろって…？」
「……1ヶ月後」
重い沈黙がいっそう重くなった。頭をかきむしって顔をあげた一人が叫ぶ。
「…何なんだよ…何で…何で俺たちがこんな目に…！」
目に見えて雰囲気が暗くなったことがわかる。いつも通りに子供達と集まる場所に向かった剣崎の前には、数人の子供しかいなかった。その子供にも目に見えて暗い影がはびこっている。
希望を持ち続ければ、大丈夫――などという軽々しい言葉をかけることも出来ない。以前の自分ならしていたかもしれないが…。
「…帰るよ…今日は…」
ひとり、またひとりと子供達は消えてゆき、残ったのは剣崎とあの少年のみだった。
「――僕も…かえるね…」
最後にはひとりになって、剣崎はため息をついた。薄暗い景色の中、肌寒さを感じてジャンパーを羽織る。
そこに書かれたＢＯＡＲＤの文字。剣崎は無意識のうちに顔をしかめ、行くあてもなくふらふらと歩きだした。

――実は、気になっている事があった。
それを見つけるために剣崎は、ひっそりと眠りについた町を歩き続

ける。
「……！」
ふいに、剣崎は息を呑む。
動きのない町で一人歩き回る男の姿。
――先日感じた殺気の正体を、剣崎は見つけることとなった――。

敵影

歩き回るその影は、何かを探しているようにも見えるし、確かめているようにも見える。
静かに忍び寄った剣崎は、その服装こそ合わせてあるが明らかにこの人間でないことを悟ると大きく息を吐いた。
「…気を付けろ、よ」
言い聞かせ、そして一思いに飛び出した。
「ッ！」
相手が驚いて口を開いたのが見える。しかし、その瞬間に剣崎の指先が相手の鳩尾に潜り込んでいた。
う、と短くうめいた後に体勢が崩れ、ためらうことなくその右腕をひねりあげた。
「――ッ――い――――…」
「…ちょっと悪いんだけど…」
痛そうにうめく男を見ながら剣崎はわびる。
「何やってたんだ――？」
「…あんたか…最近首突っ込んでるやつか…」思いもよらない答えに剣崎は眉をひそめた。
「…どういう…」
「――化け物が…お前が誰も殺さないということは知っている…！」
息を呑む。
体の中で怒りが沸騰する。
「――ッ！」
次の瞬間、男の顔面めがけて剣崎は拳をぶつけていた。濡れた感触があり、男がうめく。
「……な…にを……」
「お前たちが――お前たちのせいでここの人は…！」

――化け物？
それはどっちだ？

うめく男の声が、許しを請う悲鳴へとかわりはじめる。それとはうらはらに力を込めるほど軽くなる心。
気付けば男の意識は消えていた。我に帰って剣崎は手を休め、周囲をみわたす。
――…誰か…いる。
はっと振り返った剣崎の視線の先怯えたような目をして立っている住民の姿があった。
あわてて立ち上がって剣崎は弁明する。
「――待ってくれ…！違うんだ、これは――！」
呼び止められた住民はしきりに首を振って剣崎の言葉にうなずく。
「だ――誰か呼んできますから…」
「……誰か…？」
「だって…敵なんでしょう？その人は――」
戦慄が奔った。
力の抜けた剣崎の手から逃れて走っていく住民。
しばらくして連れてこられた集団は、剣崎の傍らに倒れている男をかかえて去っていく。
「ありがとう、カズマ。――助かったよ」
去りぎわに、一人が笑顔で剣崎に語り掛けたが剣崎の方は、どこか緊張した表情のままだ。
「…あの人…何やってたんだ…？」
「毒薬を持っていた……。おそらく井戸にでもいれるつもりだったか…」
引きつったような表情になって剣崎は自分が殴り飛ばした相手を思い出す。
「――それって…いつも戦ってる奴の一人だよな！？」
男は、どうして剣崎がそれを知っているのか――というように、不

思議な顔をする。しかし、剣崎は息もつかせないような勢いでしゃべる。
「こんなにあっさり――…大丈夫なのか…？」
とたんに相手はむっとしたような表情になった。
「俺達だって精一杯やってる――」
「だけど――！」
しかし男は冷たく言い放つ。
「これ以上どうしろっていうんだ？――いくら血を流したって俺達の住んでる場所は奪われて、追い出される！」
「――話し合いとか…なんとかないのかよ…」
「――俺達が…今までどれだけやってきたかお前は知ってるのか？」
唐突に告げられた言葉は、痛かった。
「…俺達は…もうどうしようもないんだよ……」
最後にもう一度呟いて、男もまた去っていった。

――俺達が…今までどれだけやってきたかお前は知ってるのか？

――知らない。
突然やってきて、結局自分は半分だけ首をつっこんでいただけだ。
彼らとの一線は越えられないと言いながら、自分自身越えようなどと思っていなかった。
本当に越えたいならば、自分から自分をさらけださなくてはいけない。
過去には意図も簡単にできたそれが今ではこんなに難しい。さらけだした時に待っているのは、恐怖の目であろう。
その時、剣崎は悟ってしまったのだ。
――今の自分では、結局何もできないということを…。

それから、男が殺されたことを剣崎は知った――。

敵影（後書き）

何か…心配になってきました（ノД＞。）　。

ごちゃごちゃしてきてしまったΣ（　□　；）

本能

ここが、国境付近の基地として利用される。そのために住んでいる住民は立ち去れ――。
あまりにも理不尽な勧告にも関わらず、もはや彼らはそれに従うしかなかった。

それから、目に見えて町は暗くなっていた。

ついには、ポツポツとここを離れる者が現れ始め、行くあてなどない彼らがどうなってしまうのか剣崎は不安だった。
せめてもの救いだった配給も途絶え、暗い影がはびこってここから離れなかった。
この状況に乗じて、また露骨な侵入をされ大惨事を巻き起こしてしまうのではないか――という不安もあった。

「ウェイ！」
だから、よそ者の自分だけでも笑っていたい。
剣崎のそんな思いは通じているのか、こうして遊ぶ子供たちは以前と変わらないように見えた。

それだけでもう、剣崎には嬉しい。

「ねぇ、カズマ」
「ん？」
相手の子供の棒を受けとめながら、剣崎は笑顔で応えた。

「今、せんそーでね僕達ずっと勝ってるって知ってる？」

表情が、凍てつく。
その剣崎の態度を見て子供たちは、知らないと判断したのか口々に語りだす。
「知らないの？」
「すっごい強いんだって！」
「そいつが、みんなやっつけてくれたら僕達だってここに残れるよ」
希望を目一杯つめこんでキラキラとしたその目。剣崎はいたたまれなくなって視線を逸らす。

――やっつける。
勝ち、負け。

剣崎は、そんなつもりではなかった。
相手に勝つつもりも、ましてや相手を倒すつもりも。
ただ、守りたい。――ここにある笑顔を守りたいだけだったのに。

どちらが正しいのかなんて分からない。だから難しい。
アンデッドを相手に戦っているときのほうが、よほど楽だ。――しかし、そう思った剣崎だったが脳裏に、今でも鮮明に甦る彼らの姿があった。

タランチュラアンデドだった嶋はどうだ？
あのタイガーアンデッドは？
彼らは本当に敵だったのか？
ジョーカーとして忌み嫌われていた始は？　世界を滅ぼす宿命を背負わされた彼は敵だったのか？
「……やめよ」
考えても考えても、分からないことはどうしようもない。
数十年たったひとりで歩み続けた剣崎に、時間は文字どおり腐るほ

どあった。
考えてもどうしようもないことを考えつづけるより、とっとと行動した方がいい。
たった一人、ビニールシートを敷いた砂の上で空を見上げながら剣崎は瞬きした。――と、その耳に突き刺さるような高音が響く。
「始まった…！」
ざっ、と砂を掻いて立ち上がり剣崎は音の聞こえたほうに険しい視線を向けた。

――やっつけて――。
子供たちの言葉が一瞬剣崎を躊躇させる。しかし、その後すぐに剣崎は言い聞かせた。
――俺は、相手を殺したいから戦っているのか？

いや、違う。

近づいてくるその戦闘の気配に確かに血が騒ぐ所もある。だが、俺は――。

「変身！」

かつてのようにそう告げる必要もなかったのにその時、剣崎は思わずそう叫んでいた。
その姿が水飛沫に包まれたような変化の後に、獣ともなんともとれない姿が雄叫びをあげながらその中に飛び込んでいく。
横からやってきたその存在に照準がかたむく。一斉攻撃をうけながらもその勢いは止まることなく、銃弾の間を駆け抜けていった。

――守る。守るまもる、ま、も、る、マモルマモルマモル――。

「…お母さん？」

聞こえてくるその銃撃の音に、怯えたように少女がひょっこり顔を出す。

家から一歩出てその様子を見守っていた母親は、ふいに家先に出ている子供の姿に息を飲んだ。

「出てきちゃだめ――」

彼女の父親が、あそこで一体何をしているのか…母は伝えたくなかった。

眠そうに目を擦る少女を再び家に返そうとしたその時――母の目の前で、少女は目を見開いた。

「お……母さん…」

ひゅん、と空気を割いて飛び去っていったものは、銃弾よりも遥かに重いものだった。

――まさか――。

冷たい予感が、彼らの背中を流れていった後目に飛び込んできたのは巨大な、ドーム。

砂漠の中に突如現れたそれは、真っ赤な炎を吹き上げたかと思うと、次の瞬間には轟音をあげて姿を消した。

沈黙が流れ、一瞬何が起きたか分からない。

動くこともできずに立ち止まった彼らだったが、敵はそんなことに情をかけてはくれない。

「――ヅ！」

一人が仰向けに返ったかと思うと、次々と倒れていく仲間たち。

「皆――！」

目を見開いたまま、その額の中心に穴を開けられた男にかけよる。

だが、駆け寄った一人もまた次の瞬間には、物言わぬ屍と化す。
――何が…？
呆然として立ち尽くす剣崎の目の前で、次々と追い越されていく屍。
その多くが、自分の守りたいものであることに気付いた時――その手には剣が握られていた。
――…マモル…倒す…タオシテヤル…！
剣崎の中で何かが入れ替わった。
それには気付かないまま、はたから見れば化け物でしかないそれはまた走り出した。
いささか古くさいように思えるその武器は――しかし、彼に握られれば――。
「っ…死なない…！？」
何発もの銃弾が撃ち込まれ、その体から異様な色の血液を流すそれ。
確かに銃弾を撃ち込んだのに、目の前の生き物は倒れることなくその剣を振りかざす。
ダメだ。――彼は…その最期を予期して瞳を閉じた。
「な…――なんだあれは…」
カタカタと、体がふるえだす。
仲間の死に呆然としていた彼らが次に感じたのは、恐怖。
どこからか現れてきたその生き物が、次々と人間に食らいついていく。
その体を何度も銃弾が貫いていると言うのに、まったくダメージを受けた様子はない。
「――ぅ」
目の前で繰り広げられる映像に思わずひとりがうめいた。

今また、剣が降り下ろされて赤い血飛沫が舞った。
それと同じように、その体からも緑色の液体が飛び散る。
視界に動くものがなくなって――ようやく、剣崎は動きをとめた。
ぬるぬると滑る剣が、彼の意思に答えるように姿を消して剣崎はゆらりと振り返った。
――守れた。
目の前のひとりが、まだ戦いにおびえたように座ったまま自分を見上げている。
剣崎は心の中で笑みを浮かべた。
もう大丈夫――そう告げるように剣崎は手を差し伸ばしたが、彼は悲鳴をあげて逃げていった。
「――うわぁあああッ」
「逃げろッ！」
一目散に散っていくその姿を不思議そうに見つめて――剣崎は凍てついた。
「……あ」
ふしくれだったその指は、誰かに手を差し伸ばして助けるためのものではない。
鋭く尖った指先からは、まだ人肌の温もりを持った血が滴り落ちている。
彼は、今さらながらのように自分の足元に倒れる死体に気付く。
ひとつ。
…ふたつ。
みっつ…よっつ……。
そこまできて、数えるのが恐ろしくなって――剣崎は膝から崩れた。

「う…うぁあああ――ッッ！！」

聞くこちらがわが頭を抱え込みたくなるような悲痛な悲鳴が、響き渡る。

ただひたすらに、敵を切りつけてその血を全身に浴びて――剣崎は――ジョーカーは血によっていた。

――哀れな異形の姿をしたそれは、山のような骸の中で、悲鳴をあげ続けた。

ヒトリ

「もう無理だ！これ以上ここにはいられない！」

一瞬にして焼き尽くされた民家からは見るに堪えない遺体の数々がでてきた。

これまでも民間人が負傷する事態はあったが、ここまでのものは初めてだ。

その瞬間に、彼らが握っていた最後の――希望という糸は途切れてしまった。

「出るか？――…それとも…降伏か…？」

「馬鹿言うな！今まで降伏して助かった奴らがいるか！？」

鎮まるあたり。

「戦えってか…？」

疲れきったその声に、頷くものはいない。

自重気味に笑みを浮かべて男はつぶやく。

「化け物まで出てきて…」

戦場で見た、異形。

獣ともなんともとれないその姿は、みるみるうちに人を殺し、自身は緑色の体液を流しながら叫び声をあげていた。

撃っても、撃っても、その動きは止まることをしらない。

まさに、化け物――。

「あんたももう出た方がいいわよ…」

「――…ええ」
勧められるその声に、彼女はうなずいたが表情はうかない。
頼れる場所などないし、先に去っていった住民たちがどうなったのか――全く分からないままだったからだ。
部屋を振り返った先には、ため息をつく息子の姿。窓の外を見つめながらやがて振り替えって、呟く。
「……カズマ――どこ行っちゃったんだろ？」
全く姿を見せることのなくなった、その不思議な青年のことを心配する息子に、彼女はかける言葉が見つからない。
もともと、どうして――どうやってここに来たのかも分からない異国の人間だった。
その献身的な対応も、不自然だったし…彼が状況が悪化し、ついにはその炎がここまで到達するようになった今、ここから去るといっても不思議ではない。

――だがしかし…多くの子供たちが、彼を信じていたのだろう。

「…どっか、行っちゃったのかな…」

哀しげに呟く息子に、そんな事を伝えられなかった。
父を失い、カズマになついていた。その上カズマがおそらく去った事を知れば…。
「…早く帰ってこないかなぁ…またチャンバラしたいのに」
尚もため息をつく息子から視線をそらし、彼女は最後の食糧に手を伸ばした――。

――怖い。
怖いコワイコワイ…。

こんな暑さだというのに、ガクガクと全身は震えている。
冷水を浴びせかけられたような戦慄が体全体を襲いつづけて、もう数日経つ。
まるで風邪にかかって悪寒を感じているようだ。
しかし、悪寒の傍らまざまざと思い出させる生暖かい血の感触。
それを思い出すと、また叫びたくなる。

――嫌だ嫌だ――！

溢れだしそうになるその欲求にたえて剣崎は、真っ黒な炭の上にしゃがみこんだ。
まだ熱を感じるその場には、まざまざと人が生活していた様子。

戦闘中の爆撃。
戦線で戦っていた自分たちを差し置いて、彼らは民間人を攻撃したのだ…。

それを見た瞬間理性が吹き飛んだ。――そして自分は何をした…？

結局、似たようなことをしたではないか。
ただただ流れる赤色に美惚れて、気のむくままでに爪をふるった。
それも自分はそれを楽しんでいたのではないか――？
ざらざらと手に余る炭を握りしめたまま剣崎は、風に流されるそれを見つめていた。
こんなにも今は、穏やかなのに一度きっかけがあれば獣に化してしまう自分。

彼は以前ラウズカードを全て揃えることによって進化した。
――しかし今、それらはどうなっているのだろうか？
大丈夫だ――と剣崎は言い聞かせて立ち上がった。

彼らが、よもや最悪の事態を選択するわけがない。きっとラウズカードは全て封じられているはず。
それ以上は考えないように言い聞かせる。
彼らにまた会いたくなる。――今はもうすっかり姿も変わっているであろう彼らに。

同じように年老いて最期を迎えるはずだったのに、自分はこうして置いていかれてしまった。
彼らを責めるつもりも、選んだこの道を悔やむつもりはない…ないといいたいが、本当はどうなのだろう？

結局は、寂しかったのだろうと剣崎は思う。
日本を離れて――守りたいから…といってたえきれずに人里にでてきたようなものだ。
ふと、ＪＡＣＡＲＡＮＤＡの看板が思い浮かべられる。

――始も…こんな気持ちだったのかな？

地元の子供たちと触れ合ううちに、天音と触れ合っていた始の気持ちが分かるような気がしてきた。

――しかし、今の剣崎は怖かった。

再び、彼らの前に――人間の前に出ることが。
アンデッドである自分。
ジョーカーである自分。
たったそれだけで、もう自分が信じられない。
始のことを信じられた自分が信じられない。

――こうして、だんだんと自分が信じられなくなってしまうのか？

「――ズマ！」

怖い。

「カズマ――っ！」

以前、ペットボトルを持ってきた場所に少年はやってきていた。

食糧もつきて、彼に渡せるものはもはやなかったがそれでも少年はその姿を探した。

――こないでくれ…。

「……いないのかな」

もう浮かぶ場所はない。

少年の胸の中に、苦い不安がよぎる。

それはいつしか帰ってこない父を心配したときの気持ちに似ていた。

だがふと、砂埃が舞う。

はっと顔をあげた視線の先、人型のような影が見えた。

「カズマ！？」

少年の顔が、希望に染まる。だが目にしたものの異様さに気づいて息をのむ。

――なんだろう？あれは。

カズマだろうか？

…じゃないとこんな場所に人がいるわけがない。

――じゃあ。

どうしていったい――あんな姿をしているんだ？

「クルナァ――アア」

「っうわぁあああ！？」

悲鳴をあげながら必死に少年は砂をけった。
視界に一瞬とらえたそれがまだ追いかけきているのがわかる。
砂に足をとられて転んだが必死に走る。

――何なんだろう？あれは。
怖いよ、怖いよ、怖いよカズマ――！！
走りながら少年の脳裏に浮かんだのは底の見えないような明るい笑顔。
――助けて…助けてカズマ――！！

走り去っていく少年を見ながら、それは足を止めた。
悲鳴をあげながら去っていったその姿が何を考えたかは一目瞭然だ。
――これでしばらく…ここにはこないだろう。
ふっとその姿が、一人の青年にかえる。
薄い背中が、震えていた。
……いいんだ、これで。
言い聞かせる。
これで、いいんだ…。

――彼らを本当に、守りたいなら。

零れる

「母さん――！」

悲鳴のような裏返った声をあげながら少年は家に飛び込んだ。
ガクガク震えながら、涙で顔をぐしゃぐしゃにしている息子の姿に心配そうに寄り添う。

「どうしたの――」
すがりついてきた息子を受けとめた母が、恐ろしそうな顔をする。
「か…カズマ……探しに…いったら」
全力疾走でやってきた息子は、息を切らせながら必死にうったえる。
今でも思い出せば、ぞっとする。
「お…お化けだよ……化け物がいて…」
それを聞いたとたんに、母は立ち上がった。

「そんな近くに――！？」
告げられた言葉に愕然とする。戦場に出て、殺戮を繰り返す悪魔の存在はもう有名だ。
「駄目だろ！？ひとりでそんな場所までいっちゃあ……！」
「……ごめんなさい。だけど、カズマが――」
少年のうったえに、やがてひとりが悲しそうにため息をついた。
「…カズマはそいつにやられたのかもしれないな」

――え……？

「…そんな――」
「行くったって、今は動けないだろう？」

言葉を失う母親にたんたんと告げる。カズマがいなくなったとばかり思っていたが、カズマとて今ここにいて自由に身動きがとれるとは思えない。
「…以前家畜が襲われたのも…アイツだろうな」
ざわざわと冷たい恐怖が、広がっていく。ざわざわと広まるそれは、まるでさざ波のように人々の心を揺らしていく。

それからというもの、敵は人間だけではなくなった。
存在すら分からない化け物もまた、彼らの敵となった…。

――頑張れ。
耐えるんだ。
運命…に……勝つんだ…。

握り締めた指先で、むなしく砂をつかむ。
寝そべったままの口の中にじゃり、と苦い味が広がっていく。
体から流れる血はおさまりかけて、傷口も目をあてられないほどではなくなった。――しかし、それを治そうとしてジョーカーは暴れる。
日々が、全力。
少しでも彼らの足を止めたくて、剣崎は戦い続けていた。

――たった一人で。
しかしそれでも、敵は諦めようとしない。それはまるで、かつてダークローチを相手にしていた時のようだった。

その時、鋭敏になっていた剣崎の感覚がそれを捕えた。

「っ待て――！！」

悲鳴のように声をあげた剣崎は、次の瞬間抑えていたものが溢れだすのを感じた。

「――…っぅ！」

身を丸くした剣崎の耳に、遥か離れた地で砂を踏む足の音。

一緒に聞こえる金属音。

それが向かっているのは、剣崎がずっと守りたいと思ってきた者達がいる場所――。

――…行くな……――。

もはや、彼の気力は尽きたに近かった。

「ウォアアアァァア――ッ！！」

地を這うように響き渡る獣の遠吠え。

しかし、彼らが足を止めることはなかった。

彼の思いとは裏腹に、時は迫る。

そして、一匹の化け物がその場から飛び出した――。

限界突破

「止まるなッ！！進めェッ――！」

響く命令の声を聞くまでもなく、彼らは走り続けていた。
ひとりの姿が、欠けたと思えばまたひとり、ふたり――次々と欠けていった。
「ッ！」
「だめだ、撃つな！！」
一人が向けた銃口の先を見て、悲鳴のような声をあげて制止した。
だが、時すでに遅し。
ダン、という火薬の弾ける音の後に銃弾が相手を掠めた。
「――グ……グァアアッ――！！」
爪を引っ掛けていたひとりの体を投げ出して、高く吠えた。
「馬鹿ッ！」
己が犯してしまった間違いに、怯えた様子の一人を怒鳴り付けた。
爛々とした目がこちらを睨み付け、その口元から荒々しい呼吸が吐き出されている。
――逃げられない…。
「ッ、撃て！！」

「――…なんだ…？」
その音を耳にした一人が立ち上がり、釣られるように数人も立ち上がる。
「…おい……――近いぞ…」
それは、嫌というほど耳慣れてしまった紛争の音。
その音が近いことを悟ってしまった住民らの顔に、いっせいに恐怖

が伝染する。

「どうするの！？」

「知るか！！――だいたい、どことやってるんだ…」

検討も付かない戦闘に慌てふためく。

「…何かあったのかな」

「出ちゃダメ！」

窓から顔を出す息子を家の中に引っ張って、母親は慌てて窓をしめる。

「…だって…外で――！」

「今からどうなるか分からないから――危ないの…！」

いつかはこうなると、分かっていたこと。

もはや今の自分たちには、戦えるほどの気力はないし守ることすら危ういー――。

「止め！！」

合図に、銃撃が止んだ。舞い上がっていた砂埃もそれにともなってじわじわと収まる。

動けぬまま、食い入るようにその様子を見つめていた彼らはやがて安堵の息を吐いた。

「消えた…」

跡形もなく姿を消したその場には、点々と鮮やかな緑色が残されていた。

砂に吸い込まれる事無く、その場にあったそれを気持ち悪そうに足先で突つく。

点、点、と続く色の先には――剣崎。

「ッ……！」

止まらない出血。それを荒く拭って目立たないようにしてから、走りだした。
――急がないと…。
蜂の巣状態にされて、いくらなんでも止めることはできない、と判断した。
ならば伝える事で、精一杯だ……。
必死で走る。――足に絡み付く砂の感触がもどかしくて、苛立つ。
戦闘と怪我のせいだろうか？それと共に感じる、内側で暴れるジョーカー。
「やめろよ……今は…！」
町に着いたとたんに、この姿を保てなくなったら終わりだ。
――その先には……。
いい、今は構わない。
それより先に、しなくてはいけない。
「カズマ……！？」
いきなり現れた青年の姿に住民は、ぎょっとしたように目を見張る。
しばらく姿を現さなかった青年が、いきなりボロボロの姿で息を切らせてやってきた。
「…げろ――」
「え？」
ジャンパーを砂埃で真っ白にして、所々に見えるのは緑色。
「逃げろ！――来てる――ッ！！」
「！？」
その意味を知った時、悲鳴が響いた。――おって続く悪夢のような爆音。
「か…カズマ！？」
――間に合わなかった……。
膝から力が抜けるような感触。愕然としながら目を見開いている剣崎の傍らを、悲鳴をあげてくぐり抜けていく住民達。
そこで剣崎は、はっとした。

――アイツは…！？
脳裏に甦る、少年の姿。
その瞬間、剣崎は逃げ惑う彼らに逆らって走りだした。

――…っ…。
息が、切れる。
苦しい。
苦し。

「…――！」
目の前に現れたその姿に、血が煮える。
悲鳴、悲鳴、悲鳴。

――嫌だ…っ！
どうしてこっちに来るのだ？まるで僕を追い掛けて楽しむかのように。
周りにも逃げ惑う人々は、沢山。あちこちで銃声と悲鳴。
「母さん…！」
見失ってしまった姿を探す。…――…いない。
「っ…母さん…！」
泣き声に近い声でそう叫び、息を切らせながら少年が次に叫んだのはその名前だった。
「カズマ――！！」

「変身！」
既に必要のない台詞を吐き出して、住民の姿がないのを確認して剣崎は姿を変える。
細い青年の姿が獣ともなんともとれない異形の姿へと変わり、そしてふいに現れた姿を見た人々が悲鳴をあげる。
「出たぞ――！！」
「…こんな時に…――っ」
新たな敵の出現に、人々の恐怖はさらに増す。――しかし、当の剣崎にとってそれは胸を抉る凶器。
己の姿を見て恐れられることが辛い。痛い。
ふいに彼女は、その化け物か走りさっていく方向を見て息を呑む。
「……！！」
それは、今まさに彼女が向かおうとしていた方向。
――息子がいるであろう場所――。
「ッ！駄目……！」
「おいっ！？」
あろうことか、逃げるはずのその存在に手を伸ばす母親に、あわてて手を止める。
「…あっちには…まだ――子供が……！」
「無駄に刺激をするなッ！――引き返せ！」
仲間か――それとも己に害が及ぶことを恐れてか、男は、母親を止めるが彼女はその腕を振り払った。
「嫌よ、無理よ！！」
引きつった声をあげて飛び出す。
「待って……行かないで！私を――私を！」

胸が、痛い。
傷が、言葉という刺が刺さって責め立てる。
息子の為に、恐れるべきである自分に立ち向かう母親の姿が、やきつく。

――…でも……――！

たとえ、これが自分なのだとしても。
以前の自分との違いは、異なる仮面を身につけたということだけ――。

バックルも、
カテゴリーエースのカードも必要ない。
組織だって、関係ない。

――俺は、守りたいもののために戦うんだ…！
「それが俺の仕事……仮面ライダー…！！」
確かに剣崎は、その姿を――ついに完全なるジョーカーの姿をとった今でもそう言っていた。
彼の心を体現したかのように真っ直ぐのびた剣。
それを自らの意志で出現させて、手の平にしっかりと握り締めた――。

遮断

――どこだ…。
――どこにいるんだ…！？

目の前の相手を切り付けながらも、ジョーカーの視線が探しているのは、たった一人の少年の姿だった。
「死なねぇ…！」
「…本当に化け物か！？」
体から緑色の体液を吹き出してもなお、しぶとく動き回る。
相手の緑色と、こちら側の赤色とが交ざりあって異様な色を生み出していた。
「――そっちはいい！……――放っておけ！」
「し…しかし…！」
放っておけば、この化け物は問答無用で人を襲い続けるに違いない。
だが、かといって足止めすることすらできない。
「くそ…ッ！」
「引け！そいつからは一旦、引くんだ！」
――いた…！
バラバラと自分から離れる相手はさておき、剣崎はようやく目的の人物を見つけた。

「――ッ！」

しかし、呼ぼうとしてはっとする。
血濡れた己を見て、バックルを返すことなく剣崎は人の姿に帰った。
「おい！」
逃げる人並みに逆らって。銃を構えた人間たちがこちらに気付くの

も構わず。
痛みに呻く体と本能を押さえつけ、剣崎は走りだす。

「こっちだ！――来い！」

――嫌だ。死にたくない。死にたくない。
最も原始的な欲求に支配されたまま少年は走り続けていた。
いつの間にか自分が、はぐれつづけていることに気付いた時にはもう遅い。皆とは違う方向へ、方向へと追い詰められているのだ。

追い掛けてくる、敵。
しかし、とまれない自分。
「…ッ！」
ふいに、体が前につんのめかかった。見れば、引っ掛かったのは地面から露出した木の根っこ。
裸足の少年の爪先からは、赤色の液体が滲みだす。
「痛い…！」
涙が滲む。
しかし、追い掛けてくる人影に気付いてはっと息を呑んだ。
――駄目だ、止まっちゃ駄目だ…！
肉のない細い足に鞭打って走り続ける。

――こっちだ！――来い！

どこかで、カズマの声が聞こえる気がする。
しかし彼がどこにいるのか、少年には分からない。
「…ズマ…！」
ぜぇぜぇ、と苦しげに吐き出す呼吸の合間にその名を呼んだ。

「カズマ――…！」
彼はどこにいるのか。
『こっち』とは一体どこなのか――。
分からぬままに走り続けた少年の目の前に、ふいに立ちはだかる存在があった。
「――…！！」
愕然とする。
それは、この砂だらけの地で生き延びた巨大な木。
枯れた大地に根をはって今尚己の存在を主張するそれは、しかし今の少年にとっては絶望の壁の他ならなかった。
「…ちょろちょろちょろちょろしやがって……――」
背後から、ゆっくりとした足取りで近づいてくる相手の手には、銃。
ギラギラと照りつける太陽の光に鈍く光るそれを見て、少年の顔が恐怖に変わる。

――…嫌だ…。

相手の歪んだ口元も。
染み込んだ赤い色も。
走り来る途中にみた、死体も。
なにもかもが甦って、そしてそれが自分へと繋がる。
――僕……このまま…。
最後に見た父ではなく、在りし日の穏やかな笑みを浮かべた父が。
父のいなくなった後でもかわらぬ笑みで自分を包み込んでくれた母が。
――甦って、もう二度と出会えぬのだろうか…？と少年が首を傾げたとき、

ふいに、
あまりに短くて軽い一発の銃声が鳴り響いた。

本当に、それが命を奪うものなのかと、問い掛けたくなるような軽い音が――。

損失

自分の腕のなかで、動かない少年を見たとき、内側で何かが弾けた。

響いた銃声。

短くて、軽い一発の音によってその命が奪われるのか――？

こらえていたものが一気に吹き出して、剣崎は吠えた。

もはや人間の声ではない。

一頭の獣が、天に向かって声を張り上げそして次の瞬間青年の姿が変わる。

――獣に。

本当に、一体の化け物へと――。

「ッ！？」

「グゥアアアア！！」

照準を向けられていた銃を凪ぎ払い、化け物は声をあげながら相手の首を掴んだ。

「――っぐ…ぁ！？」

二メートルは優にあるその体で、意図も簡単に男持ち上げる。

宙をさ迷っていた足がぶらぶらと揺れていたが、ふいにぴたりと動きを止めた。

その目で死んだ相手を見てから、ぽいと地面に投げ捨てる。

化け物の手に握られている真っ直ぐな剣は、血に濡れて既に色を変えていた。

「来るぞ…逃げろ…！」

狩っていたものは、
狩られるものへ。
逃げ惑う相手を、片っ端からジョーカーは凪ぎ払っていく。
武器を使う迄もない。その鋭い爪の生えた手で、肉を抉り、命を奪う。
「……！！」
母親は、敵を凪ぎ払いながらこちらにやってくる化け物の姿に息を呑んだ。
真っ赤に染まった指先から流れる血。――…まさか…と顔から血が引いていく。
「逃げろ！走れ！！」
もはや敵味方関係なく人々は逃げ惑う。自分たちを狩っていた存在が死体とかして、地面に転がっているのも目に入らない。
――…こいつが…この化け物が…。
震える母親の目に、ふいに投げ捨てられた銃が飛び込んできた。
「ウ…ウェエエゥォッ！！」
轟く咆哮。奮われる爪。
母親は、次の瞬間その手に銃を握っていた。
「――ッ！！」

熱い感触。
まだ動けるヤツがいたのか――とジョーカーが視線を転じた先にいたのは、何と。
――――え？

涙で濡れた真っ赤な顔で、こちらに向かって銃を構えている。
――そういうと思ったわ――。だからせめて、一緒に食べましょうよ。
そう微笑んでくれた人と本当に同じ人なのか？
背筋が凍てついたような気持ちがよぎった時、ジョーカーは気付いた。
いつの間にか、自分に銃を向けている人物たちがすりかわっている。

――……どうして？

思わず問い掛けていた。
だが、どうしてなのだろうか？
自分が守ろうとしていた存在たちが、なぜ自分に銃を向けているのか？
もしかして違ったのか？
なぜ？
どうして？

止まった思考の中で、ふいにジョーカーが見つけた答えは一つ。

――タタカエ。

それが、ジョーカーの――アンデッドの本能。
ひどく納得しながら、ジョーカーは剣を持ち上げる。
――そうか。
その行動に悲鳴があがる。
――そうすれば、よかっ――。

「カズマァアアアッ！！」

少年の声が、響き渡った――。

アウト

何があったかは、はっきりとは覚えていない。
ただ最後に意識を手放すその前に、どこかで見た覚えのある紺色のジャンパーが目に入った。

――…カズマ？

その腕が自分を包み込んだかと思うと、銃声が響いた。カズマの体はゆれて、その体から液体が飛び散った。
そして、次の瞬間その姿が変わった。驚くもなにもない。地面に脱ぎ捨てられたジャンパーの先にいたのは、いつか見た化け物。

「グゥアアアア！！」

――カズマ……！
僕を殺そうとした相手に飛び掛かっていくのを最後に、僕は意識を失った。
だが気絶していたのは短い間だったらしい。目が覚めるとまだ、ジャンパーは巨木の傍らにあり――目の前には死体があった。
「カズマ！？」
立ち上がってその名を呼んだが姿はない。
――どこ…！？
「カズマァッ！」
走りだして少年は後悔した。
どうして、あの時僕は逃げてしまったんだろう？
あれは化け物なんかではなかったのだ。

――僕は、なんでカズマの前でカズマを恐がってしまったんだろう……！？

優しい笑みを浮かべて笑う青年の姿を思い出しながら、少年はついにその姿を見つける。

食料も水も、何も見返りを求めないまま無償につくしてくれた彼――。

散らばっている死体の中で立ち、向けられた銃を見て不思議そうに首を傾げているソレを見て、少年は息を呑んだ。

――待って…！

みんな、やめて――！！

「カズマァァァァッ！！」

精一杯声を張り上げる。

少年に気付いた住民が驚いたように目を丸くし、ソレの動きがぴたり、と止まった。

――カズマ？

耳の奥で何重にもエコーするその名前に、やがて彼らは息を呑む。
動きをとめた化け物――たった今まで自分たちが撃っていた相手が、
その声に動きを止めた。
「……え？」
一言を話すのがやっと。
母親は生きていた息子の姿に力が抜けそうになっていた時、駆け寄
ってきた少年が恐れることなくソレに抱きついた。

――カズマと呼ばれていた青年にしていたように。

「やめて、カズマ……皆も撃たないで」
泣きじゃくる少年の声が、怖いまでに静かになったその場に響く。
「ごめんね…カズマ――ごめんなさい。本当にごめんね――っ」
――傷つけて、ごめん。
あなたは精一杯自分たちにつくしてくれたというのに。――ごめん。
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい――。
だが、やがて薄い少年の体にその節ばった指が、そっと触れた。

「いいんだ――」

初めて聞いた、咆哮ではないその声に、住民たちは息を呑む。
状況が飲み込めず、ただただ沈黙していた彼らは、聞こえてきたそ
の声にやがて全てを悟る。

「カ…ズマ？」
「カズマなのか……？」

しかし、ソレはもう何も言わなかった。

ソレは、――剣崎一真は、まだ堕ちてはいなかった。…――ジョーカーという名前の、殺戮を繰り返すアンデッドには。
しかし、ギリギリの攻防を繰り返していたその心は一度折れた。――殺戮を繰り返す存在に、堕ちかけた。
しかし、再び彼はその心をもってして己を取り戻す。

しかし、獣とも人ともなんともとれない姿の彼は、何も言わないままただ首を振った。

――なぜかは分からない。
だがどうみたって人には見えない凶悪な姿だというのに、その表情は、本当に笑っているように見えた――。

せめて彼に、水を

「これより目的地の住民に接触します」

頑丈な装備をみに纏った男の防弾チョッキには、いくつかの図形が組み合わされたＢＯＡＲＤのロゴが。
途方にくれたように立ち尽くす住民達に近づくと、彼らの言葉を紡ぐ。

「すみません。――こちらに、二十歳ぐらいの我々と同じ国の男がいませんか？」

尋ねると、明らかに彼らの表情に痛みが奔った。
その様子に、男は確かに対象者がいることを悟った。

「いるのですか――？」

しかしそこに落ちている沈黙は普通のものではない。
居心地悪そうに視線を泳がせたり、自分から目を逸らすもの達の様子に彼は何かを悟る。

「……もう…いないさ」
ぽつり、と響いた声は震えていた。
住民の誰かが発したその言葉の意味をはかりかねて男が眉をひそめたその時、一人の女の悲鳴のような鳴き声が響き渡った。

「…私は…カズマを――カズマを……！！」

カズマ。
男はすぐにそれが目標としている人間――……いや、もしかしたらそうではない者だと分かった。
女の一人が泣き崩れたのを始めて、次々と己を罵る声で満ちあふれていく。
男は静かにその場から離れると通信機を手にした。

〈――橘だ〉

すでに壮年期を越え、老いをまつだけになったにも関わらず、彼の声は力強かった。
そんな相手に今から男が告げなくてはいけない言葉は辛い。

「対象の……――剣崎一真なのですが、どうやらもう移動しているようで…」

そう告げた瞬間、受話器越しにでも分かるような、深い、深い、彼の絶望。
こうして彼の絶望を感じるのはもう何度目だろう？
男はたまらないように眉間に皺をよせて、そこを撫でた。

〈分かった――〉

最後にそう告げて、通信は切られた。

彼は僅かにため息をついて空を見上げる。

――彼が――現ＢＯＡＲＤ理事長の橘朔也が、どうしてあそこまで剣崎一真という男を探しているのか男には分からない。
以前に一度、隊長である自分にだけ極秘情報としてある写真が見せられた。

そこに映っていたのは、若かりしころの橘と彼より少し年下と思われる茶髪の男。この男が、自分の探す剣崎一真だと悟るのに時間はかからなかったが不可解な点がある。
――だったらどうして…今でも探す姿が、二十歳そこらになるんだ？
この写真に写っている橘が年を経たように、剣崎一真も年を経ていなければおかしいではないか――。

だが、自分に与えられた任務はそれなので深く追求しないようにしている。
――もしかしたら、剣崎一真という人物は、人間ではないのかもしれない…と思いながら。

何気なく道を――…道とも呼べないような場を歩いていると、ふいに男は目を疑うようなものを見た。

「……おい」

一本の巨木に向けて、高く掲げたペットボトルの水を注いでいる少年。
それはつい先ほど、ＢＯＡＲＤによって供給されたばかりの貴重な

ものだというのに一体何をやっているのか――。
思わずそれを止めようとして、その細い腕を掴んだときふいに、かっと少年はこちらを睨み付けてきた。

男は、思わず息を呑む。

その少年の目は、涙で濡れていた。

「はあ…」

なんとも間の抜けたため息が零れた。
相変わらず、薄くて頼りないその体が砂ぼこりを抜けながら歩いている。
日本にしばらくいた間はずっと共に走っていたブルースペイダーは、日本を出た時にもう別れてしまった。
今はこうして一人で歩くしかない。
――…運命と戦う…か。

もしもあの時、自分の名前を呼んでくれた少年がいなかったら……。
やり切れないように剣崎は目を閉じた。――空腹に負けて、本能的

に家畜を襲ったときと同じ。
あの時に、もう繰り返さないと決めたのに…。

――…負けるのか？

本能だ、意志が無かった、などといって。
いいや、と剣崎は首を振る。――自分は、ジョーカーではない。…たとえ、そう呼ばれる存在であろうと、自分はジョーカーにはならない。
守るため、がいつのまにか殺すため――に。……犯してしまった罪は、受け入れるしかない…。――剣崎には、それを受け入れてなお戦うことができる意志が、己の中の本能を殺す力もあった。

――…それでも、胸の中で濁ったものは晴れない。

じわ、と一瞬輪郭が滲みかけて、剣崎は荒々しくその細い腕でぬぐった。
あの後彼らはどうなったのか…。少なくとも、ＢＯＡＲＤがやってくれれば、どうにかしてくれるだろう――と剣崎は思った。
――にしても……
「まだ探してるのか、橘さんは……」
思わず苦笑する。
内心ひやっとしながらも、その懐かしいロゴを見ると――飛び付きたく成る。

――剣崎は、はにかむように苦笑すると、また一歩歩みだした。
それに続いて、点、点、と砂の上を足跡が続いていく。

――その足跡の先では、「カズマ」、と、子供達が笑いながらその名を呼んでいるという――。

自分を止めた男を睨み付け、少年は再び巨木に向き直った。
かすれた紺色のジャンパーの表面、わずかに見えるＢＯＡＲＤのアルファベット。
砂をかぶって白く霞んだその前で、つぶやく。
「…カズマは、ヒーローだよ…」
そして再び、そっとペットボトルをかざす。
無償に、ただ他人のことを愛して救ってくれた一人の青年。
太陽にキラキラと輝くボトルの中身を、少年は一思いにひっくり返した。

砂の上にただ零される水はあっという間に濁り、吸い込まれていく。
しかし、少年の涙は途絶えることなく、いつまでもいつまでも流れ続けた。

――どこにいるかも分からない彼を思って。
何も求めず、それ故拒絶すらも受け入れってしまった青年のために
――

――せめて彼に、水を。

後書き

終わりました。
はい。

稚拙な文章にここまでお付き合い下さった方、ありがとうございました！
この作品は、初めて公開した作品だったので不安ばっかりでしたが…完結できてよかったですΩÅΩ；

今回、携帯で書いた文章なのでどうしても薄くなってしまいがち（打つの苦手）だったので…パソコンにネットが繋がったら（いつだよ）手直ししていきたいです！

で、せめて彼に、シリーズ第三段も連載していますので！　よろしければこれからも、見てやって下さい＾＾

本当に、ありがとうございました！

後書き（後書き）

Ｈ２３．０３．１６．

【完】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0376q/

せめて彼に、水を

2011年7月3日21時04分発行